

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ネルヴァルの『オクタヴィ』について
Author(s)	柴田, 道子
Citation	フランス文学 , 12 : 15 - 22
Issue Date	1978-05-20
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040908
Right	
Relation	



ネルヴァルの『オクタヴィ』について

柴田道子

『火の娘たち』の中の短編『オクタヴィ』については、従来、作中に散在する諸テーマの萌芽や、ネルヴァル自身についての貴重な証言という面で部分的には認められてきたものの、概してあの名作『シルヴィ』との類似が強調され、しかもマイナーな『シルヴィ』、つまりは『シルヴィ』の二番煎じと見られる方向に、その評価が傾きすぎていたように思われる。例えばレイモン・ジャンは、その著書『欲望の詩学』の中で、

「『オクタヴィ』は、多くの面から一種の『シルヴィ』の新版のように思われる」(1)
と述べているし、ジャン・リシェは、

「ネルヴァル自身についての貴重な証言である『オクタヴィ』は、芸術的には失敗作である。それに対して『シルヴィ』は、長い間あたためられ熟成されたものだけに、ほとんど完全な成功作と言えるだろう」(2)

と述べている。さらにロス・チェンバースは、『オクタヴィ』に対して肯定的な立場を取りながらも、やはり次のように書いている。

「『オクタヴィ』が、『シルヴィ』程の見事な結構を持っていない事は認めねばならない。だが、その構造が完全に明解であり、はっきりと『シルヴィ』のそれを示している事も認めよう」(3)

確かに、3人の著名なネルヴァル研究家の指摘どおり、1853年12月17日に以前の3度にわたる書き換えを経て決定稿の発表された『オクタヴィ』と、同年8月15日に発表された『シルヴィ』との間には多くの類似点が認められる。時間と空間に対する作者ネルヴァルの態度、現実界と非現実界の相克、1つの至高の愛を分けた2つの愛というライトモチーフなどが、その良い例として引き合いに出されることであろう。

しかしこのような類似にもかかわらず、『オクタヴィ』と『シルヴィ』の間には、明らかに一種のずれが認められる。そしてそのずれが如実に現われているのが、双方の作品に登場する3人の女性主人公の変化なのである。そこで、この2つの作品のヒロインたちの役割、並びに属性を各々比較対照することによって、このずれの実体を見極め、ひいてはネルヴァル文学における作品『オクタヴィ』の意義について多少とも言及してみたいと思う。

(1) 2人のオーレリー

双方の作品に登場する3人のヒロインとは、『オクタヴィ』の方では、オーレリー、ナ

ポリ女、オクタヴィであり、『シルヴィ』の方では、オーレリー、アドリエヌ、シルヴィである。そこでまず各々のオーレリーを比較してみると、この2人が共に主人公の最愛の女性、唯一至高の恋人という位置を占めている事が次の一節によって明らかになる。

「私の生命はあなたの意志以外の何ものにもかかわりをもたないのですし、私の最大のねがいは、あなたのために死ぬ事ではないのです」(O. P. 287)

「私は彼女を自分の生きがいと感じていた。いわば彼女は、私だけのために生きていたのだ」(S. P. 241)

もちろん『オクタヴィ』と比べてはるかにページ数の多い『シルヴィ』では、この一節の他にも数々の例文が見られるが(4)、それらも一様にオーレリーの唯一性、最愛の恋人としての位置を示すものばかりなので、本文では取りあげないことにした。双方の作品において女優として現われるオーレリーは、主人公が自らの生をかけて愛している現実のただ1人の恋人として、共にゆるぎない位置を占めているのである。

(2) ナポリ女とアドリエヌ

次に刺繍を生業としているナポリ女と、ヴェロア王家の血を引く城主の娘アドリエヌを比較してみよう。ナポリ女の方では、

「私は、あなたに似た1人の若い娘に出会ったのです」(O. P. 288)

という一節によって、またアドリエヌの方では、

「もう何年も忘れていた1つの以かよった顔が、今や不思議な鮮かさで浮かびあがってきた」(S. P. 247)

という一節によって、この2人の女性が各々先に述べた2人のオーレリーと相似の登場人物だということが示されている。その上この2人には、各々次のような数節によって、オーレリー1人を愛する主人公を、その外面の相似で誘惑する神秘的な亡霊という役割が与えられている。

「私は一晩中眩惑されるままになり、かろうじて言うことが理解できたこの女性が、実はあなた自身で、魔法によって私のもとに下り来たったのだと思い描いてみたいという気持になってしまったのです」(O. P. 288)

「私を誘惑すると同時におびえさせもしたこの七霊から、私はやっとの思いで逃げ出したのでした」(O. P. 289)

「私は、はたしてこれが本当にあったことなのか、それとも夢で見たことなのかと、自問したい気持になってくる」(S. P. 257)

「私は、私の一生をよぎったいまわしいまぼろしの事をまざまざと思いおこした」(S. P. 259)

そしてこの2人の神秘性、非現実性を暗示するかのようになり、各々の女性が登場する場面は、ミスティックな雰囲気につつまれている。

ナポリ女の部屋は、

「私が入っていった寝室には、偶然かそれとも部屋の中に置かれていた物の奇妙な選び方のせいかな、何かしら神秘的な気配がただよっていた」(O. P. 288)

と描写されているし、アドリエヌの登場場面は、

「彼女の唄がすすむにつれて、大きな樹々から闇がおりてきた。そして射しそめた月の光は、じっと聞き入っている私達の輪の中央に、1人離れて立つ彼女だけを照らし出した。かすかなもやが寄り集って芝生をおおい、白い綿毛のように草の葉先にまつわりながら流れるのだった。私達はまるで天国にいるような心地がした」

(S. P. 245)

と表現されているのである。

このように見てくると、ナポリ女とアドリエヌの場合も、ほぼ同じ属性と役割を担わされているように思われるが、各々に与えられている神秘性及び非現実性をさらに細かく見ていくと、そこに微妙な差異がつけられているのに気付かざるをえない。というのも、先に述べたようにアドリエヌの登場場面は、闇、月の光、もや、天国といった要素によって確かに神秘性が表わされ、その上「ばら色とブロンドの幻」(S. P. 247)、「栄光と美の蜃気楼」(S. P. 246)という比喻によって、彼女の非現実性も強調されているが、その神秘性、非現実性は決していまわしいものではなく、誘惑者という彼女の役割に反して、何かしら聖処女的な清らかさ、天使のような神々しさに満ちあふれている。とりわけ、

「彼女は、聖なる人々の住まう天界のほつりをさまよう詩人ダンテにはほえみかけたベアトリーチェかと思われた」(S. P. 246)

という一節や、「けだかい理想」(S. P. 272)という彼女に献げられた呼称が端的にそれを示している。

ところが、ナポリ女の方はどうだろうか？ 先に見た彼女の神秘的な部屋を飾っているものを取りあげれば、以下のとおりである。

「金ピカの飾りにおおわれた一体の黒いマドンナ」(O. P. 288)

「聖女ロザリアの彫像」(O. P. 288)

「神話の神々をあらわす4大素を描いた古い絵」(O. P. 288)

「占いと夢判断を扱った1冊の本」(O. P. 288)

こうした異教的な雰囲気に加えて、女が腕にいだいた幼子や、キリストの涙を意味する発泡酒《lacrima-christi》(O. P. 288)を考えあわせれば、そこにはまぎれもなく篠田知和基氏の指摘される、正統キリスト教のうらがえしである呪われたまがまがしい

黒ミサの祈祷所が出現する(5)。もちろんそこで耳なれない暗号を口にし、恋人がいると告げながらも初対面の主人公の気を引く女は、まちがいなく黒ミサの女司祭、アドリエヌが象徴する聖なる天使の対蹠である恐ろしい魔女となるのである。

「奇妙な振舞いをし、王者のように飾りたて、誇り高く浮気なこの女性は、私の目に、人が夢1つと引きかえに魂をひきわたすという、テッサリアの魔法使いの女達の1人のように映った」(O. P. 289)

以上、ナポリ女とアドリエヌは、同じ唯一の恋に対する誘惑者という役割を担いながらも、各々が持つ属性は、天使と魔女というようにまるで正反対を表わしている。

(3) オクタヴィとシルヴィ

それでは、その名前が各々の物語の題名にもなっている2人の少女、オクタヴィとシルヴィの場合はどうだろうか？ 一見したところこの2人の少女は、先のナポリ女とアドリエヌ以上に、さらによく似ているように思われる。まず若いイギリス娘オクタヴィの、

「主人公の目をひくきびきびした面差し」(O. P. 285)

「緑の水を切って進むほっそりした体」(O. P. 285)

「そのやさしさ、清純な無邪気」(O. P. 291)

という特長は、そのまま隣村の少女シルヴィの、

「とても元気で生々していて、肌はうっすらと日焼けしていた」(S. P. 245)

「彼女がいる、善良で心も清くくらししている彼女が」(S. P. 247)

という特長に対応している。そして前者の、

「この水の娘は、ある日、自分が釣った奇妙な獲物を自慢しながら私の所にやって来た。彼女はその白い手に持った一匹の魚を私にくれたのである」(O. P. 285)

という一節が示すオクタヴィの動物界、つまりは現実の生の世界とのつながりは、魚と花、動物界と植物界というちがいであれ、後者シルヴィの、

「私達は真赤なジキタリスが丈高く幾つもの茂みになって咲いているのに出くわした。シルヴィはそれで大きな花束をつくった」(S. P. 253)

という一節や、彼女の身からいつも離れぬ「髪にさした花々、胴着にはさんだ花束」(S. P. 258)とはっきりと対応しているのである(6)。このようにオクタヴィとシルヴィとは、その内面の初々しさと無邪気さによって、さらにはその肉体にあふれる清新なエネルギーによって、清らかな若さの象徴であると同時に、双方が参加している水々しい生の世界のおかげで、はっきりとした現実の象徴という属性を担っている。そしてそのような属性ゆえに、生きたまま見てはならない非現実の誘惑に悩む主人公を救済するという役割を、この2人の少女は担わされることになるのである。オクタヴィの方では、

「若い英国の女性が約束してくれた待ち合わせのことを念頭に思い浮かべたおかげで、私はそれまで心に抱いていた数々の不吉な考えから、やっとひき離されたのである」(O. P. 290)

という一節が、シルヴィの方では、

「私は彼女の足もとに身を投げ出した。ぼくを救ってくれたまえ」(S. P. 259)
という一節が、何よりもよくそのことを示している。

こうして、若さと現実の象徴という属性のみならず、救済者という役割においても一致しているオクタヴィとシルヴィは、なおその上、主人公のオーレリーへの一途な思いと魅力的な誘惑者には勝てず、ついに救済者の役を果たせぬまま、享受できたかもしれない幸福の可能性として、双方の物語の最後を飾るという役割においても一致しているのである。各々の作品の最後には、次のようなほとんど同一の言葉が繰り返されている。

「おそらく私は、おそこに幸福を残してきてしまったのだと思った」(O. P. 292)

「たぶん私の幸福はそこにあった」(S. P. 273)

しかし、このようなほとんど完全とも言える一致にもかかわらず、オクタヴィの方には、シルヴィには見られぬ不吉な属性が付け加えられているのを見逃すことはできない。第1に、

「かわいそうに、きっとあなたは胸が悪いのですね」(O. P. 286)

という一節は、オクタヴィの若々しい肉体の下に隠されたいまわしい病毒、言いかえれば死の要素を示しているし、そのことは、絶えず彼女につきまとう病弱な父親の存在によってさらに強められている。その上

「彼女は自ら女神イシスに扮してみたがった」(O. P. 291)

という一節が示すように、ポンペイ見物の途中でオクタヴィがいなく気まぐれは、こともあろうに女神イシスの役を演じるという、はなはだしい瀆神の行為だったのである。では、何故女神イシスの役を演じることが瀆神行為となるのだろうか？ その答えは、やはり『火の娘たち』に含まれている短編『イシス』の中に見い出される。『イシス』の中でネルヴァルは、直接女神イシスの口をかりて次のように言っている。

「この私は自然の母、諸元素の支配者、諸世紀の第1源泉、神々の中で最も偉大な女神、冥界の霊達の女王。この私は、自らのうちに神々と女神たちを合体させるもの」(I. P. 301)

つまりネルヴァルにとって、女神イシスは唯一絶体の神聖不可侵の神であり、この女神に匹敵するのは、そして女神の役を演じることができるのは、彼の心の中でこの女神と合体同化していた永遠の恋人オーレリーその人だけだったのである。それ故、たとえ清純無垢なオクタヴィとはいえ、気まぐれに女神イシスの役を演じることは許されず、それどころか

この行為のおかげで、彼女は神を犯す呪われ人となり、同時にオーレリーと肩を並べようとする唯一の恋に対する誘惑者という役割までしょいこんでしまう。そのことは、この場面のすぐ後で、主人公が急速にさめていくオクタヴィへの思いに自らとまどいながら語っている、次のような言葉が何よりも雄弁に証明している。

「帰途、先刻我々がもちだした考えの偉大さに感動した私は、思い切って彼女に愛を語ることが出来なかった…私があまりにも冷やかなのを見て、彼女はそれをとがめだてしたほどであった」(O. P. 291)

こうして主人公は、誘惑者ナポリ女の手から逃れたように、もう1人の誘惑者オクタヴィからも逃れていく。そしてオクタヴィの、この呪われた誘惑者という隠れた特長は、物語の最後で語られる10年後のオクタヴィの有様の中に、もっとも端的に示されている。

「彼女は著名な画家と結婚していたのだが、彼は結婚後まもなく体が完全に麻痺してしまった。気の毒な娘は、夫と父親にはさまれて悲しく生きること生活に捧げてしまったのである。それに彼女の優しさ、清純な無邪気さをもってしても、夫の心に流れる残忍な嫉妬をうまくしずめることができなかった。ああ、人の心の神秘よ、このような情景の中に神々の復讐の残酷なしるしを見なくてはならないとは！」(O. P. 291. 292)

この一節の最後には、オクタヴィに対する神々の復讐という言葉がはっきりと明記されているのである。このように若さと現実の象徴、そして救済者となるべき役割を担わされているはずのオクタヴィは、その反面、無意識であるにせよ死の象徴であり、呪われた誘惑者という役割も持っていることになる。

それでは、一方のシルヴィの方はどうだろうか？ 紙面のつごうですべてを取りあげることはできないが、

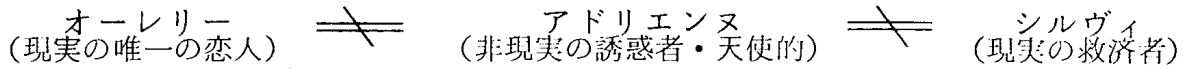
「私はシルヴィを自分の過失で失ってしまった。だが、わずか1日彼女に会えただけで、私の魂は十分立ち直ることができたのだ。以後私は、彼女を微笑をたたえた立像として、知恵の女神の神殿に安置することにした。私が深淵のふちで踏みとどまることができたのは、彼女のまなざしのおかげだった」(S. P. 269)

という一節や、グラン・フリゼとの幸福な結婚生活は、あくまでこの隣村の少女が、オクタヴィとは対蹠の存在であることを示しているのではないだろうか。

以上、2つの作品の3人のヒロインを各々比較検討した結果、その間に見られる一種のずれがかなりはっきりと見極められたように思う。つまりそれは、次に図式化したように、

『オクタヴィ』				
オーレリー (現実の唯一の恋人)	≡	ナポリ女 (非現実の誘惑者・魔女的)	≡	オクタヴィ (現実の誘惑者)

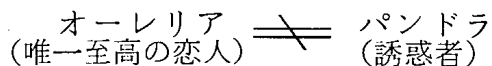
『シルヴィ』



まず第1に、『シルヴィ』に見られる、現実の唯一至高の恋人、彼女に対立する非現実の誘惑者、そしてその誘惑者に対立する現実の救済者という3者対立の関係が、『オクタヴィ』では、現実の唯一至高の恋人に対立する、非現実と現実の2人の誘惑者という1対2の対立関係に変わっているずれであり、第2には、『シルヴィ』の中では、まだ天使の面影をとどめていた非現実の誘惑者が、『オクタヴィ』では、恐ろしい魔女になり変わっているというずれなのである。ここには明らかに、ジャン・ゴミーエの指適する《dégration》(7)の作用が働いており、『オクタヴィ』の中では、二重の意味で誘惑という観念が強調されているのである。

それでは一体、このずれをどう考えるべきだろうか？ 先にもあげたジャン・リシェのように、単なる二番煎じのヴァリエーションと考えるべきだろうか？ そうではなくて、ネルヴァルの文学的軌跡の中でこそ、このずれをとらえるべきだと思われる。というのも、この『オクタヴィ』の後、つまり1854年10月31日に、さらに恐ろしい誘惑と、その誘惑の結果錯乱にまでいたる悲惨を示している『ラ・パンドラ』が発表されていることを考える時、『シルヴィ』から『ラ・パンドラ』へと移行していく1つの文学的道程として、この『オクタヴィ』という作品が、かならずや必要であったと思われるからである。ちなみに『ラ・パンドラ』のヒロインを図式化すれば、以下のとおりである。

『ラ・パンドラ』



『オクタヴィ』では、まだ形の上だけでも3者拮抗の図式が保たれていたものが、『ラ・パンドラ』では、さらに収斂されて2者対立、至高の恋人と誘惑者のまっこうからの対立に変わっている。もしここで、『シルヴィ』の世界と『ラ・パンドラ』の世界とが直結していると考えたら、少女シルヴィの体現している現実の救済者的存在の消滅が、あまりにも唐突に、そしてあまりにも曖昧になってくるのではないだろうか。『シルヴィ』の後に『オクタヴィ』があって、やはり現実の救済など一切存在しないという苦々しい、だが断固とした確信を経て始めて、『ラ・パンドラ』の身をさくような苦悩が生まれ、ひいては現実でも非現実でもない、それらを通りこした超現実のめくるめくような『オーレリア』の救済の世界が、すなわち非存在が不可能な形で存在する世界が、最後に残された拠り所として拡がってくるのである。

以上、作品『オクタヴィ』は、単なる『シルヴィ』の二番煎じにはとどまらず、『シル

ヴィ』と『ラ・パンドラ』を結ぶ1つの鉤として、ネルヴァル文学の歩みの中で確固とした1歩を刻んでいるように思われる。

- 注 (1) Raymond Jean, *La Poétique du Désir*, p. 193, Seuil
 (2) Jean Richer, *Gérard de Nerval*, p. 60, Seghers
 (3) Ross Chambers, *Gérard de Nerval et La Poétique de Voyage*, p. 227, José Corti
 (4) « Elle avait pour moi toutes les perfections, elle répondait à tous mes enthousiasmes, à tous mes caprices ... » (O. p. 241)
 « Ces enthousiasmes bizarres que j'avais ressentis si longtemps, ces rêves, ces pleurs, ces désespoires et ces tendresses ... ce n'était donc pas l'amour ? Mais où donc est-il ? » (S. p. 271)
 (5) 篠田知和基, 『ネルヴァルの生涯と文学』, p. 112 参照, 牧神社
 (6) cf. Raymond Jean, *La Poétique du Désir*
 (7) Jean Gaulmier, *Gérard de Nerval et Les Filles du Feu*, p. 88, Nizet

テ キ ス ト

Gérard de Nerval, *Oeuvres tome 1*, Bibliothèque de la pléiade, 1966

なお本文中の略号O.は『オクタヴィ』, S.は『シルヴィ』, I.は『イシス』を示し, 各々の翻訳は, 筑摩書房版『ネルヴァル全集II』の『火の娘たち』を参照した。

(広島大学文学研究科 博士課程後期在学中)